

言えなかった「行ってきます。」

山王中学校3年 青木 陽依

「行ってきます。」この一言を、私たちは毎朝気軽に口にして家を出る。そこには、また家に帰ってくるという前提がある。ある時、戦時中の日本の特攻隊員は「行ってきます」ではなく「行きます」と言って家を出るという話を知った。この話を知って私は「行きます」という言葉は、帰って来られる保証がないという現実があったからこそ、覚悟の言葉として言われていたのだと思った。「行ってきます。」と「行きます」どちらの言葉も同じ家を出るという行動なのに、そこに込められた意味はあまりにも違っていた。

私はこの話をきっかけに戦時中の人々の生き方や、想いについて考えた。特攻隊員には「桜花」や「剣」といった帰還を想定されていない「丸裸の飛行機に乗って、敵の艦船へ体当たりする」という任務が与えられていた。特攻隊員の多くは、出発する前に家族や大切な人へ手紙を書いていたという。その手紙には感謝の言葉や別れの言葉と共に、「行ってきます。」ではなく「行きます」という言葉も残されていた。特攻隊員は自分と同じ、また十代の人や二十代の若い人たちが主に担う役割で、皆自分の命をかけて出撃していた。

この事実には私は強い衝撃を受けた。それはこれから先の人生を自分で選ぶ余地もないまま、二度と戻れないという絶望の大きな波に飲み込まれていくようなものを感じた。同じまたは近い年齢の人たちが家族や友達と過ごす日常を強制的に手放し、自分の命をかけて任務に向かっていたという事実は、今の私には想像しきれないほど重いものだった。

また、送り出す家族も無事に帰ってくる保証のない別れを受け入れなければならなかったことを考えるとその苦しさはとても胸に残るものだった。このような話を知ることで、今の私の生活がどれほど恵まれているものなのかを改めて感じた。毎日食事をとり、安心して眠りについて、学校に通い、友達と笑い合える毎日は当たり前のもではなく守られている日常なのだと思う。

だからこそ私は、この平和な毎日を当たり前のものとして過ごすのではなく、大切に守っていかなければならないものとして考えていきたい。戦争の歴史を知ることをやめず、そこから学び続けることが平和を守ることにつながるのだと思う。そして私たちの今の生活は多くの人の犠牲や願いの上に成り立っている。そのことを忘れず、一日一日を大切にしながら生きていきたい。

また、平和は一度失われてしまえば簡単には取り戻せないものだということを忘れてはいけないと思う。戦争は遠い昔の出来事ではなく、今でも世界のどこかで続いている現実であり、それは決して他人事ではない。もし、自分の身に同じような状況が身に起きたとき、私は何を感じ、どのように行動できるのだろうかと考えることがある。すぐに答えを出すことはできない。

だからこそ日常の中で「知ること」「考えること」を止めてはいけないのだと思う。歴史を学び、事実を受け止め、自分の言葉で、平和について考えることが、大切に守っていくべき毎日を未来へとつないでいく一歩になると信じている。